現代ハンガリー・ナショナリズム試論

――2010年のカーロイ・ミハーイ像をめぐる論争から――

辻　河　典　子

序

ハンガリーは2010年に、第一次世界大戦の講和条約であるトリアノン条約が調印された1920年6月4日から90周年を迎えた。同条約により、ハンガリーの領土は戦前からのいわゆる「歴史的領土」の三分の一、9万3,000平方キロメートルに縮小し、国境外にマジャル系住民を300万人以上抱えることとなった。この国境線はドイツの後ろ盾で一部の領土を回復した1930年代末から第二次世界大戦期を除けば現在まで維持されており、ハンガリーのナショナル・ヒストリーでは、トリアノン条約とその調印日の6月4日が国境を越えたマジャル民族の悲劇として現在まで語られている。

2010年には、第一次世界大戦末期の1918年10月30-31日にハンガリーで起きた共和主義的な革命（現在のハンガリーでは「ヒナギク革命」と通称、「（ハンガリーの）十月革命」とも呼ばれる）で成立した政権で首班となったカーロイ・ミハーイ（1875-1955年）[1]の銅像をめぐり、急進的なハンガリー・ナショナリストと彼らを批判する勢力との間で論争が生じた。この銅像は国会議事堂に近いコシュート・ラヨシュ広場の北側の一角にあり、20世紀ハンガリーの代表的な彫刻家の一人であるヴァルガ・イムレによって制作され、カーロイの生誕100周年に当たる1975年3月3日に除幕式が行われた。この論争では、カーロイとその政権が領土解体の端緒を作ったと考えるナショナリストは、コシュート広場からの銅像の撤去を求めた。一方、銅像の撤去に反対する勢力は、カーロイを民主主義的共和制の独立したハンガリー国家の先駆者と位置づけ、銅像の撤去を求めるナショナリストを「ファシスト」と攻撃した。

カーロイに対する評価が肯定と否定で二分されるのは、1918-19年の二つの革命をめぐって戦間期以来ハンガリーで続けられてきた議論に起因する。特に、ハプスブルク二重君主国の終焉とそれに属していたハンガリーの歴史的領土の解体という時期にカーロイは政権を担っていたため、彼に関する先行研究の大

部分が 1918-19 年の一連の革命とトリアノン条約についての評価と密接に関係している。

ハンガリー近現代史研究者のロムシチ・ゲルゲイは、1918 年秋のハプスブルク君主国の解体期には成人していた 1900 年以前生まれのオーストリアとハンガリーの政治エリートの 1945 年以前の回顧録から歴史的記憶の形成と神話化の集合的な過程を分析した[2]。彼によれば、オーストリアでは帝国解体が言説を作る上での要素となっているが、ハンガリーでより言説を決定つけていたのは 1918-19 年の「トラウマ」であった。基本的にハンガリーの政治エリートの全ての回顧録で革命期の叙述が見られ、その議論の基礎と解釈のモデルの背後には 1918 年 10 月の革命（「十月革命」）を擁護する立場と否定する立場との政治的分断があった[3]。前者の立場を取ったのはカーロイ政権に積極的に関与した「十月主義者 oktobristák」と呼ばれる人々であり、国内ではホルティ時代には勢力を弱めた進歩主義者が、亡命者となった革命政治家も含む反体制派の擁護を目指した。一方、十月革命を否定する立場を取ったのは右派、すなわち君主国時代からの保守派と反革命の下で統合された急進右翼の両派であった。彼らの基本目標は「十月革命」の信用を落とすことにあり、これに関連してトリアノン条約による破局の責任を「十月主義者」、より広義には革命エリートに求めようとしていた。ゆえに「十月革命」を否定した側の論者は、1918 年以前のハンガリーにおける内政問題の存在を認めていなかった。1920 年以降のハンガリーの外交政策はトリアノン条約は列強による不正な講和であるという立場だったが、少なくとも内政に関しては領土解体におけるカーロイらの責任が強調され、右派の歴史解釈の中心となっていた。

ロムシチ・ゲルゲイの分析は領土解体が基準であったが、カーロイ政権に参加した「十月主義者」以外に 1918 年 10 月の「十月革命」を擁護しなかったという点では筆者も同様の見解である。しかし、彼の分析では 1919 年以降の亡命先で執筆された回顧録が参照されるものの[4]、カーロイ政権への参加者（「十月主義者」）にとって、民主主義的共和制の試みなどを「十月革命」の独自性として 1919 年 3 月 21 日に成立した評議会共和国（同年 8 月 1 日まで続いた共産主義革命政権）と対比して主張することが重要な政治課題であった点には言及されていない。同じくカーロイ政権に参加した社会民主党の右派は革命崩壊の原因を共産主義者に帰すと同時に、1919 年 3 月に共産党との合同を目指した社会民主党中央派も批判している[5]。

一方で、戦間期の体制側の研究は 1918-19 年の二つの革命を一連の事件と見な

し、カーロイ政権を国家解体の端緒と位置づけて政権に関与した改革派政治家・知識人を批判した[6]。なお、戦間期の共産主義者による分析はカーロイ政権に関する議論よりも1919年3-8月の共産主義政権の検証に偏る傾向にあった[7]。

第二次世界大戦直後、冷戦下で共産主義体制が確立する前の人民民主主義期の1946年5月にカーロイはハンガリーへ帰国する。名誉回復がなされた彼は、1947年8月にはパリ大使に任ぜられるが、粛清対象とされたライク・ラースロー外相の裁判に抗議する形で1949年6月に辞任し、再び亡命する。

「ヒナギク革命」／「十月革命」に関する研究が本格化するのは革命40周年を迎える1950年代後半からであり、1919年3月の共産主義革命の前史的な位置づけとして研究が進められた[8]。一方で、カーダール・ヤーノシュ率いる体制下では「反革命」と位置づけられた1956年の「ハンガリー事件」も、カーロイ政権の評価に影響を及ぼした。1960年に刊行されたフカース・ジェルジのモノグラフは、カーロイ政権で少数民族大臣となったヤーシ・オスカールらの市民急進主義がその「反革命」に理念的な影響を与えたという見解から、世紀転換期から革命期に至る市民急進主義者の活動を否定的に描いた[9]。

革命50周年を迎える1960年代後半には、ハイドゥ・ティボルによる1918年10月の革命と1919年3月の革命の各研究書が刊行された[10]。カーロイの革命回顧録も1960年代後半に復刊され[11]、1970年代にはハイドゥによるカーロイの伝記も出版された[12]。リトヴァーン・ジェルジはカーロイ政権に参加した政治家・知識人の研究に取り組んだ[13]。1980年代には共産主義体制への批判と「中欧」概念の再評価という文脈を背景として、共産主義に批判的で連邦国家構想を提示したヤーシへの注目に象徴されるように[14]、「ヒナギク革命」／「十月革命」の研究はさらに盛んになる[15]。同革命をハンガリーの政治・経済・社会を民主主義的に改革しようとした試みとして解釈する視点は体制転換後も現在まで続いている[16]。

以上より、カーロイと「ヒナギク革命」／「十月革命」の評価においては「ハンガリー」という領域とその「ハンガリー国家」の理念基盤となる「民主主義」という二つの要素が分析の際に重視されていることが分かる。2010年のカーロイ像をめぐる論争での対立点は、まさにこの二つであった。この論争の背景にあるハンガリー・ナショナリズムの特徴に関して一つの試論を提示するのが本稿の目標である。

1．体制転換後のハンガリー政治の状況

1-1．1990 年代から 2000 年代前半まで

まず、1990 年代以降のハンガリーにおける政治状況を概観したい。ハンガリーでは 1989 年の体制転換の後、2006 年を除いて左右両派の間で政権交代が続いている。1990 年春の国会議員選挙で勝利したハンガリー民主フォーラムのアンタル・ヨージェフ首相率いる連立政権は「欧州への回帰」を目指して市場経済化に取り組んだが、インフレや失業率の増加、社会保障の縮小など経済の混乱に直面し、1994 年の議会選挙では社会党（1989 年 10 月に労働者党から改名）が与党に復帰する。社会党は自由主義系の自由民主連盟と連立を組んだホルン・ジュラ政権を発足させるが、経済の混乱は続いた。同政権は対外関係の安定化に努め、北大西洋条約機構への加盟は 1997 年 11 月の国民投票を経て 1999 年 3 月に実現し、欧州連合への加盟交渉も 1998 年 3 月から開始された。一方、自由民主連盟にとって社会党との連立は 1988 年の結党以来の反共産主義方針の転換であり、以後は都市知識人を中心とするリベラル派左派政党としての性格を強めていく。

1998 年 5 月の国会議員選挙ではフィデス＝ハンガリー市民党のオルバーン・ヴィクトルを首相として[17]、フィデスと独立小農業者党、民主フォーラムの中道右派系の連立政権が発足する。同政権はナショナリズム的な傾向で周辺国との対立も度々引き起こした。対立の代表例の一つが 2001 年制定のいわゆる「地位法」である。教育や就労などの面で隣接国に居住するマジャル系住民への支援を定めていたことから、ルーマニアやスロヴァキアなど周辺国からの反発だけでなく欧州連合からも勧告・裁定を受け、同法は修正された。

2002 年 4 月の国会議員選挙では、野党第一党だった社会党が、ホルン政権では財務相も務めた非党員のメッジェシ・ペーテルを首相候補として選挙に臨み、選挙協力を行った与党のフィデスと民主フォーラムに勝利して、自由民主連盟との連立政権を形成する。しかし 2004 年 5 月の欧州連合加盟直後に実施された欧州議会選挙で社会党は得票率を伸ばせなかった。さらに自由民主連盟との経済政策の対立からメッジェシ首相は辞任し、メッジェシ政権で子ども・青少年・スポーツ大臣を一時期務めた社会党員のジュルチャーニ・フェレンツが首相となる。2006 年 4 月の国会議員選挙に社会党は勝利し、第二次ジュルチャーニ政権が発足した。

1-2．2006 年以降

2006 年 9 月 17 日、同年 5 月 26 日にバラトンエーセドで開かれた社会党の国会議員団による非公開会合で選挙対策として「過去 1 年半から 2 年にわたって嘘をつき続けてきた」とジュルチャーニ首相が語った 25 分間の録音[18]がハンガリー・ラジオなどに送付された。この録音内容に抗議する市民が国会議事堂前のコシュート広場に集まり、18 日未明には一部が暴徒化して近くの国営ハンガリー・テレビの建物に乱入した。コシュート広場ではその後も抗議が続いた[19]。

2006 年は 1956 年の「ハンガリー事件」から 50 周年であった。このため、オルバーン元首相が率いる最大野党フィデスを中心とした保守派による「1956 年革命」との連続性に言及した政治的言説も見られ[20]、その記念日である 10 月 23 日にはジュルチャーニ首相の辞任を求めた急進右翼とブダペシュト市警察との間で大規模な衝突も生じた[21]。

ジュルチャーニ首相は 10 月 6 日に国会で謝罪を行ったが[22]、2009 年春まで首相の座に留まり、フィデスを中心に政府と社会党に対する攻撃が続いた。さらに、いわゆる極右政党である「ヨッビク・ハンガリーのための運動」（通称「ヨッビク」）も勢力を拡大した[23]。

体制転換後のハンガリーは将来の欧州連合加盟を意識した西欧資本の投資先となったが、経済的には決して順調ではなかった。2008 年 5 月 7 日付の欧州中央銀行 2008 年度収斂報告でハンガリーは国家債務比率など各項目でユーロ加盟基準に達していないことが指摘され[24]、目標であった 2009 年からのユーロ加盟は認められなかった。さらにハンガリー経済は 2008 年秋からの世界金融危機の影響を受けて同年 10 月に通貨フォリントが急落する[25]。ジュルチャーニ政権は欧州連合と国際通貨基金への支援要請を行い、議会内政党との会合を通じて野党にも協力を求めるが[26]、失業率の上昇や通貨の下落が続き、政権批判がさらに高まった。

2009 年 3 月の社会党党員集会でジュルチャーニ首相は辞意を表明する[27]。次期首相候補となったのは 2008 年 10 月以来の経済危機への対応に当たってきたバイナイ・ゴルドン国家開発・経済相（無所属）である。彼は 4 月 14 日に社会党と自由民主連盟などの推薦で首相に選出された[28]。バイナイ政権の各種政策はジュルチャーニ政権の路線を踏襲しており、野党とそれを支持するメディアを中心に政権批判が続いた。

2009 年 6 月 7 日にハンガリーでは欧州議会議員選挙が実施された[29]。欧州人民党に属するフィデスとキリスト教民主人民党[30]が 14 議席を獲得して勝利し、ヨ

ッビクが初めて3議席を獲得した。社会党は4議席を確保して第二位を確保したが、社会党と閣外協力関係にあった自由民主連盟は議席を失った。民主フォーラムは1議席を維持した。市民団体を母体として2009年に結成された中道左派政党「政治のもうひとつの可能性Lehet Más a Politika(LMP)」と人道党の連合は議席を獲得できなかった。LMPは同年7月に欧州緑の党に加盟する[31]。このように、体制転換20周年の年に実施された欧州議会議員選挙は、自由民主連盟と民主フォーラムという体制転換において重要な役割を果たした政党の後退と、ヨッビクとLMPという新しい政治勢力の伸張を窺わせるものとなった。

2010年4月11日と25日に行われた国会議員選挙でフィデスとキリスト教民主人民党が全386議席の3分の2以上を確保して勝利した[32]。社会党は59議席で第二党となった。ヨッビクはドナウ川以東を中心に47議席を獲得し、第三党として初めて議会内政党となった。LMPも16議席を獲得して初の議会内政党となる。10月3日の地方選挙でも多くの地域でフィデスとキリスト教民主人民党が勝利を収めた[33]。

4月11日の選挙が終了した時点で既に過半数を獲得していたフィデスとキリスト教人民党は、新政権発足前から二重国籍法の検討に入り、これに対してスロヴァキア政府が強く反発して外交問題に発展した。保守系新政権の発足といわゆる極右勢力の躍進という政治潮流の中で、ハンガリーは歴史的領土解体を確定させたトリアノン条約の調印から90周年である6月4日を迎える。

2．2010年のカーロイ・ミハーイ像をめぐる論争

2-1．トリアノン条約調印90周年記念日前後

フィデス・ハンガリー市民同盟とキリスト教民主人民党は、新政府発足直後の5月31日にトリアノン条約調印の記念日である6月4日を「国民連帯の日」と定める法律を与党・ヨッビク・LMPの賛成多数で通過させ、6月4日には国会で追悼集会を開催した。投票を棄権した社会党は集会への不参加を決めたが、前国会議長のスィリ・カタリンは出席した[34]。

それに先立つ6月3日には、ヨッビク党員がカーロイ像に黒い布をかけるデモンストレーションと記者会見を行った[35]。同党のブダペシュト代表であるツェグレーディ・ヤーノシュは、トリアノン条約による領域解体と1919年3-8月の評議会共和国政権に大きな役割を果たしたような人物の像が国会議事堂周辺にあってはならないと批判してカーロイ像の移転を求めた。

国会議員ヘゲドゥーシュ・タマーシュもトリアノン条約の責任をカーロイに

求め、国会と同広場のあるブダペシュト五区の議会の発議によりカーロイ像をブダペシュト二十二区のメメント・パーク[36]に移すことを主張した。さらに彼は、国会議事堂近くの自由広場にあるソヴィエト記念碑も撤去し、その場所には戦間期に置かれていたトリアノン条約の記念碑群を置くことも求めていた。

ヨッビクは14日にも、「我々民族の歴史の中心の広場であり、ハンガリー人民の結束と民族の誇りの象徴の場」であるコシュート広場からカーロイ像を撤去してメメント・パークへ移転させる要求を国会が政府に提議することを求めた。また、ブダペシュト五区にはティサ・イシュトヴァーン[37]の像を1934年に建立された場所に建てるイニシアティブを取ることを求めていた[38]。

このヨッビクの行動に対して、社会党党首レンドヴァイ・イルディコーは6月3日に記者会見を行い、カーロイがトリアノン条約とは無関係であると反論した[39]。彼女はヨッビクの手法がスケープゴート探しであり、そのスケープゴートがハンガリーの進歩主義の形成の中に見つかると信じているのだと指摘した。そして1918年10月の「ヒナギク革命」が1919年3月の評議会共和国の準備段階になり、それがトリアノン条約の契機になったとするヨッビクの見解は思慮を欠いたものだと批判した。

6月3日のカーロイ像の下でのヨッビクの示威活動を批判するために、市民運動系の政治団体「緑の左派」も同日夜にカーロイ像の下で同団体代表のタマーシュ・ガーボル・ミクローシュらが参加して集会を開き、カーロイ像にろうそくの献灯と献花を行った[40]。カルマール・シラード代表代行はハンガリー通信社の取材に対して、右派と急進右翼の政治家は事実を受け入れるようにと求め、第一の共和国の指導者であったカーロイに責任を押しつけることはできない、カーロイは［筆者注：ハンガリーのナショナル・ヒストリーにおける象徴的存在である］セーチェニ・イシュトヴァーンやコシュート・ラヨシュあるいはナジ・イムレのようなものだと述べた。

カーロイ像の撤去には与党関係者も言及した。フィデスの設立メンバーの一員であるケヴェール・ラースローは6月9日にナショナリスト系の『マジャル・ヒールラプ』紙とそれを母体としたエコーTVとの会合で、4年のうちにはカーロイ像が現在の場所から撤去されているであろうこと、そして個人的な意見としながら、代わりにケートリ・アンナ（1889–1976年）の像を設置すべきだという見解を述べた[41]。彼女は戦間期から社会民主党で国会議員として活動した人物で、第二次世界大戦後は社会民主党と共産党との合同に反対して1943年3月に党を除名されている。共産主義体制確立過程での逮捕と恩赦を経て、1956年10

月の政治変動の中で復活した社会民主党では党首に選出され、第二次ナジ・イムレ政権にも名を連ねた。1956年11月4日、ウィーンでの第二インターナショナルの会合からの帰路に第二次軍事介入の報を受けて亡命した彼女は、その後ベルギーなどで亡命者の政治活動において重要な役割を果たしている。このケヴェールの発言に対しては、社会党のレンドヴァイが11日の記者会見でフィデスのナショナリスト的な政策を批判し、カーロイ像を残すことを求めた[42]。

以上のように、2010年4月の国会議員選挙では保守系政党が圧倒的多数を確保すると同時に、いわゆる極右政党が議会第三党に躍進し、ハンガリー社会の「右傾化」を印象づけた。オルバーン政権は二重国籍法などで国境外マジャル人を意識した政治方針を採り、トリアノン条約調印90周年の記念日には議会を利用して公的に「民族的記憶」の再確認を行った。この過程でカーロイ・ミハーイに対する政治的評価が再び問題となったのである。

2-2.「国民軍」ブダペシュト進駐91周年記念日前後

カーロイ・ミハーイをめぐる政治対立は、「国民軍」がブダペシュトに進駐して91周年に当たる同年11月に再燃する。「国民軍」とは1919年8月に当時フランス軍の勢力下にあったセゲドで結成された反革命軍事勢力で、元帝国海軍提督ホルティ・ミクローシュが指揮していた。ブダペシュトでは評議会共和国政権が1919年8月1日に倒れると、社会民主党右派による内閣が成立するが、ルーマニア軍によるブダペシュトへの侵入、クーデタによるフリードリヒ・イシュトバーン内閣の成立、急進右翼勢力による革命協力者やユダヤ人らに対する「白色テロル」の継続と、ハンガリー国内では混乱が続いた。このような混乱を収束させて講和会議への代表を創出するために1919年11月に講和会議主導で会議が開かれ、ルーマニア軍のティサ川東岸までの撤退と「国民軍」がブダペシュトに入ることが承認された。翌1920年1月に普通選挙権にもとづく選挙が実施されるが、社会民主党は急進右翼勢力からの妨害を受けて選挙をボイコットする。選挙は小農業者党が勝利し、3月に招集された議会でホルティが摂政に選出される。以後、ハンガリーは領土修正を最大の外交課題として、権威主義的な体制が確立されていく。したがって、急進的なハンガリー・ナショナリストにとって1919年11月16日とは、1918-19年の一連の革命で混乱したハンガリーに秩序を復活させる契機となった記念日であった。

2010年11月16日の夜、ヨッビクがカーロイ像を舞台に、カーロイ・ミハーイのトリアノン条約への責任の追及と国民軍のブダペシュト進駐を記念した集

会を開いた[43]。開会と参加者への感謝の辞を広報官ミルコーツキ・アーダムが行った後、副党首の一人であるノヴァーク・エレードはカーロイ像の首に「私はトリアノン［講和条約］に責任があります！」と書かれた札を掛けた。

同党所属の国会議員ガウディ＝ナジ・タマーシュは、カーロイ像がコシュート広場に立ち続けていることが自由広場のソヴィエト記念碑と同様に危険であると批判し、ヨッビクが2010年の総選挙前から聖王冠の法的継続性を主張してきたことを述べた。彼は、この集会当時にハンガリー国会で進行中だった憲法改正の議論における聖王冠の扱いを引き合いに出しながら、政権与党であるフィデスとキリスト教人民党はその聖王冠の概念を祖先の精神とは全く違う形で実現しようとしていると批判した。引き続いて登壇したヘゲドゥーシュ・タマーシュもカーロイ像の撤去を求め、1918年秋の協商国との休戦交渉において軍の武装解除に応じた点を「カーロイ・ミハーイ単独の罪」と批判した。

セゲディ・チャナードとヴォルネル・ヤーノシュは、カーロイではなくオルバーン政権の治安政策を相次いで批判した。特にヴォルネルはヨッビクの下部組織である「ハンガリー防衛団」の元構成員に対するピンテール・シャーンドル内務相の方針を攻撃した。

最後に党首のヴォナ・ガーボルが演説に立った。彼は今日のハンガリーの実情について、ホルティのブダペシュト進駐から91年であるにもかかわらずトリアノンの悲劇に直接そして多大なる責任を有するカーロイ・ミハーイの像が立っていること、ハンガリー国内で他国の警察が活動可能な状態であること、フィデスが進める憲法改正の動きはフィデスに有利に働くようにするものであること、外国人によるハンガリーでの土地購入の緩和が検討されていることを挙げ、革命的な政治活動の継続を呼びかけた。そして現在の政権はカーロイ的［筆者注：ハンガリー国家を損なうもの］だと述べ、真の国民政府がハンガリーには必要であると主張した。

以上より、2010年11月16日夜のヨッビクによる集会は、歴史的領土の空間認識にもとづく急進的なナショナリズムを背景としてカーロイの歴史的責任を追及することを大きな原動力に、現政権を批判する場として利用されていたことが読み取れる。

このヨッビクによる集会と同じ時間帯には市民団体「4k!（第四の共和国）」[44]による集会がブダペシュトの東駅で開かれた[45]。彼らは1918年11月16日に最初のハンガリー共和国が建国されたことの記念を呼びかけた。共和国建国へと導いた「ヒナギク革命」はハンガリーの独立・ハプスブルク家の廃位・普通選挙

権・封建的な大土地所有の解体のために戦ったものであり、11 月 16 日がホルティの進軍ではなく共和国の記念日となり、この観点で公式に「共和国の日」となることを同組織は訴えた。彼らはカーロイ政権の基盤となった国民評議会の設立が行われた傍のホテルに因んで「アストーリア」として現在知られている交差点を「ヒナギク広場」と名付けることも主張した。

さらにその週末の 11 月 21 日には、同じカーロイ像の前で、ハンガリー反ファシスト連盟に属する「反ファシスト・新スパルタクス連盟」と「緑の左派」の呼びかけで集まった人々が対抗集会を開催した[46]。ハンガリー・ユダヤ信仰共同体連盟の代表フェルドマーイエル・ペーテルは、先のヨッビクの集会でカーロイ像の下に集まった国会議員たちがカーロイ・ミハーイとユダヤ人と「祖国の裏切り者 hazaáruló」の三要素を急進右翼が結びつけている点を指摘した[47]。

また、ハンガリー民主憲章[48]にも署名しているマールトン・ラースローは、ハンガリーの領土解体はカーロイが政権を担う 1918 年秋以前に決定済みであったこと、1919 年 3 月のカーロイの辞任は講和会議の決定に承伏できなかった故であることなど、急進右翼がカーロイを攻撃する際に根拠とする「歴史的事実」が誤りであることを挙げた[49]。彼は、1956 年のナジ・イムレ政権にも参加したビボー・イシュトヴァーンのホルティ体制の分析（最初と最後が半ファシズムの国家体制、その間は権威主義的な国家体制）を参照しながら[50]、ヴォナ・ガーボルらヨッビク党員とその支持者をファシストと同一視した。最後にマールトンは「カーロイ像を守ろう。カーロイ、ヤーシ、アディ・エンドレ[51]とその同僚たちの記憶を守ろう。現実に攻撃されているもの、共和国の諸理念を守ろう。今日、そして毎日。」と呼びかけて演説を締めくくっている。

リベラル派政治哲学者のタマーシュ・ガーシュパール・ミクローシュも、貴族出身のカーロイが何世紀にもわたって抑圧されてきた農民の側に立った数少ない例外の一人であるという観点では「裏切り者」に見えるが故に、今日でも追及を受けているのだと指摘している[52]。

このように 2010 年 11 月 21 日に行われた対抗集会の参加者は、ヨッビクに代表される急進右翼勢力が反ユダヤ主義的な表現も伴いながらカーロイを「祖国の裏切り者」と断罪したことに対し、急進右翼勢力を「ファシスト」とラベリングした。また、マールトンはカーロイと彼の支持者を擁護する際に「共和国の諸理念」を擁護しており、彼が 2010 年のハンガリー共和国とカーロイ政権が採用した共和制との間に理念的連続性を見出していることを読み取ることができる。

2-3．その後の動向

このカーロイ像の撤去を求める動きは2011年に入っても続き、3月にはブダペシュト選出の与党キリスト教民主人民党の議員が同市議会に対してカーロイ像のコシュート広場からの撤去を求めた[53]。

6月24日には「ブダペシュトのコシュート・ラヨシュ広場の再建について」と題された議員発議を、フィデスのラーザール・ヤーノシュ、バルシャイ・イシュトヴァーン、L．シモン・ラースローとキリスト教民主人民党のハルラッハ・ペーテルの4名が提出した。これは2014年5月31日までにコシュート広場を「国会議事堂の正面においてハンガリーの憲法の中心広場の役割を満たす領域に相応しく形成するために」[54]政府に求める内容であった。

その発議の条項の中には広場の美術作品のファサードを1944年以前の状態に戻すことを可能とする内容が含まれており、1975年に設置されたカーロイ像も対象となる。この提案は7月11日に賛成253票、反対92票、棄権1票で可決された[55]。一方、カーロイ像とコシュート広場近くの自由広場にあるソヴィエト記念碑を可及的速やかに撤去するというヨッビクからの修正提案は賛成39票、反対307票で否決されている[56]。

ところで、この発議において基準とされた1944年とは、ドイツ軍によるハンガリー占領（1月）とファシスト政党である矢十字党によるクーデタ（10月）が起きた年である。（ハンガリーはその後、1945年4月にソ連軍によって全土が「解放」された。）2011年4月にブダペシュト市議会は共産主義時代から使われていた市内26か所の通りや広場などの名称を変更することを決定し、同年6月から施行された。これはフィデスを中心とする保守系政治家の意向が強く反映されたものであった[57]。現在のハンガリーでは、カーロイ・ミハーイをめぐる第一次世界大戦後の革命と領土解体の再評価だけでなく、共産主義時代の評価も含めた20世紀ハンガリー史全般の再評価が進んでいると考えられる。現政権がどのようにコシュート広場を改築していくのかを含め、近現代史の政治利用については今後注目する必要があるだろう。

3．カーロイ・ミハーイの評価とハンガリー・ナショナリズム

3-1．カーロイ・ミハーイの評価

このような政治動向やカーロイの評価の政治利用について、主だった歴史研究者の反応は冷静であった。ハンガリー通信社はカーロイ・ミハーイの評価に

関してハイドゥ・ティボルとゼイドレル・ミクローシュの二人の歴史研究者にインタビューを行い、2010年6月20日にその内容を配信している。ハイドゥは科学アカデミー歴史学研究所の学術相談役で、先述のように1960年代から1918-19年革命に関する研究に従事してきた。エトヴェシュ・ロラーンド大学人文学部歴史学研究所助教のゼイドレルは1990年代後半より西欧の研究動向も踏まえながら戦間期ハンガリー政治史を論じ、2000年代以降の中堅世代では代表的な研究者である。戦間期ハンガリーの領土修正主義に関して外交史研究と表象分析を組み合わせた彼の博士論文は、ハンガリー語版のみならず英訳も刊行されている[58]。

ハイドゥとゼイドレルは共にカーロイの力不足を認識していた。カーロイが領土解体を回避できたのか否かという問題に対して、ハイドゥは第一次世界大戦勃発により不可避だったと考えていた[59]。彼は、カーロイが君主国解体において何ら役割を果たしていないと強調し、カーロイの責任を首相として適切な対応を取れなかったことに見出していた。

ゼイドレルの見解もハイドゥと重なるところが多い。彼は、カーロイの具体的な歴史的責任は主に第一次世界大戦終結後に、戦勝国の民主的で民族の自己統治を最先端に据える約束（「十四か条」を指すと思われる）を信じた問題、そして西欧の信任を喪失しながら国内の軍事力を動員しようとはしなかった問題にあると述べた[60]。しかし、戦争に勝利した西欧列強と周辺諸国に対抗して武力によって領土削減を妨げることに成功したであろうという確証がないこともゼイドレルは指摘している[61]。

さらにゼイドレルは、オーストリアとの政治的妥協の中でハンガリーの政治的自立を確保しようとする1867年以降のアウスグライヒ体制下で、カーロイはオーストリアに対抗して自立しようとする1848年革命の理念にもとづいて活動していたと同時に、君主国が第一次世界大戦に参戦した当初から戦争に反対しており、大戦末期にそれまでの親ドイツ的な戦争政策が破綻すると、厭戦気分が住民の間で広がる中で高い評判を得ていたカーロイ以外に親協商国の姿勢を表明できる人物がいなかったという見解を示した[62]。「ヒナギク革命」／「十月革命」では参戦当時の首相であったティサ・イシュトヴァーンの暗殺が旧体制の終焉の象徴となり、1920年代のホルティ体制下ではカーロイら「十月主義者」を暗殺を教唆した存在として非難する政治的意図からティサ暗殺についての裁判も開かれる。ゼイドレルはカーロイとティサ暗殺との関係は今日まで疑問符が付いていると述べ、ホルティ体制においてもティサ暗殺はカーロイに責任が

あると証明することができなかったと指摘した[63]。

ではカーロイの失敗はどこにあったのか。ゼイドレルは、カーロイが国内の民主主義的改革と平和主義的政策を試みて親協商国的な立場を示そうとしていたのに対し、協商国も周辺の国民国家に惹かれる国内の民族的少数派もそれを望まず、カーロイと共同歩調を取らなかったことを挙げる[64]。彼はさらに、ロシア革命を受けて協商国側で君主国の解体も1918年春には既に決定済みであり、カーロイには責任を負わせられないとも述べている。ゼイドレルはハンガリーにとってより好ましい国境線が可能であったのか否かという問いも提示しているが、軍事的に戦勝国側と後の小協商国側の軍事力が1918年11月以降はハンガリーの軍事力と比べて強力であったと指摘して、その不可能さを示唆した。

こうして、1919年3月21日のカーロイの辞任の頃には、親協商国・平和主義的な政策によって歴史的領土を維持しようとするカーロイの考えは破綻していたとゼイドレルは総括し、さらにハンガリーで歴史的領土の解体という民族的悲劇の後には、皆にとって特に適切な領土解体のスケープゴートとしての役割がカーロイに求められているという解釈を示した。

2010年10月27日には、エトヴェシュ・ロラーンド大学人文学部歴史学研究所教授のプリツ・パール、スロヴァキアのコマールノにあるシェイェ・ヤーノシュ大学の学部長のサルカ・ラースロー、先のハイドゥ・ティボル、ハンガリー科学アカデミー歴史学研究所副所長のポーク・アティッラが、ブダペシュトのコシュート・クラブで「カーロイ・ミハーイと共和国」と題した講演を行った[65]。プリツは、カーロイが普通選挙での国会議員選挙を実施しなかったことと全般的な土地分配を開始しなかったこと、さらに社会民主党だけでの政府が形成されている間は大統領の地位に留まることができると信じていたことの3点を誤りだと指摘した。サルカは、4年間続いた第一次世界大戦の後で兵士たちが帰国を望んでいたためにカーロイは彼ら兵士を動員できず、カーロイ政権は近隣国と対峙することができないと当時考えており、カーロイ政権で少数民族大臣を務めたヤーシ・オスカールの政策も講和会議までのものとして暫定的に位置づけられていたと述べている。すなわち、カーロイが政治的に自由の利かない状態であったことをうかがわせている。

これに対してハイドゥは、カーロイは常に民主主義勢力を集合させる存在だったが、その勢力は共産主義者に対しては開かれなかったこと、そして思想的には社会民主主義者に最も近かったカーロイが社会民主党には何度も失望していたことを明らかにした[66]。ハイドゥは、カーロイが反ファシズム運動を開始す

る第二次世界大戦期まで政治面で多くの場合消極的であったことにも言及している。

一方、20 世紀ハンガリー史におけるスケープゴートの問題に関する著作もあるポークは[67]、戦間期の世論はハンガリーの分解という集合的な罪を、誤りではあるが明確にカーロイに押しつけて回避しており、人々がスケープゴートを探す過程でなぜ歴史的ハンガリーが解体したのかという複雑な問いへの回答を探していたのだと指摘した。

以上から、現在のハンガリーの歴史研究者の間での「ヒナギク革命」／「十月革命」とカーロイ・ミハーイの評価に関しては、第一次世界大戦後の領土解体は戦勝国側の意向から避けられないものであり、戦後政治の担当者を考慮した際に第一次世界大戦参戦当初から戦争反対を主張していたカーロイが適任であったが、カーロイはその状況に対応できるだけの政治的手腕を持ち合わせておらず、さらに親協商国的な政治路線を敗戦国であるハンガリーが採ることを戦勝国側が求めていなかったという分析が成り立っていることが分かる。そして、それらの分析からカーロイに領土解体の責任は求められないにもかかわらず、ナショナリスト的な政治言説の中でカーロイが領土解体のスケープゴートと位置づけてきたのだと解釈されている。

このスケープゴートという解釈は、カーロイを領土解体の原因と見なす急進的なナショナリストの主張を理解するには非常に有効である。しかし、カーロイを民主主義的共和制の先駆者として擁護する主張を下支えするには不十分である。そこでカーロイを擁護する主張も念頭に置きながら、ハンガリー・ナショナリズムの持つ特徴について考察したい。

3-2. ハンガリー・ナショナリズムと空間・理念・時間をめぐる試論

2. で述べたカーロイ像をめぐる論争では、ヨッビクに代表される急進ナショナリストがカーロイをトリアノン条約締結と歴史的ハンガリーの解体の原因を作った「祖国の裏切り者」として攻撃したのに対し、反急進右翼派はカーロイを民主主義的共和制の概念と結びつけてカーロイを擁護し、急進右翼を「ファシスト」と批判した。前者は歴史的領土に象徴される空間認識に、後者は民主主義的共和制という理念に注目しており、一見すると両者の議論が噛み合っていないようにも思える。しかし、その違いは理想的なハンガリー国家を構想する際の注目点の相違に過ぎず、現在のハンガリー・ナショナリズムを歴史的視点から強化する試みとしては共通している。（もちろん、ナショナリズムと関連

づけた歴史の構築と利用は決してハンガリーに特有の現象ではない。こうしたデモンストレーションは政権批判の手段として行われる側面もあり、そのナショナリズム的言説が登場する文脈を考慮する必要がある。トリアノン条約90周年、左派勢力への不信と急進的なナショナリズムの伸張、経済不況という各種の条件が2010年に重なったことも、この論争が起きた背景として重要であろう。)

ここでは、このハンガリー・ナショナリズムの特徴について考察を進めたい。ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』で19世紀ハンガリーの「公定ナショナリズム」に言及し、政治権力を担っていたマジャル人貴族が自由主義とナショナリズムの高まりを受けて自己の立場を守るために「近代化」改革を行い、アウスグライヒ以降、特に19世紀末以降に彼らの政治権力が強化されて国内の民族的少数派をマジャル化する政策へと繋がったと述べている[68]。この議論は第一次世界大戦前のハンガリーを念頭に置いているために歴史的領土の一体性は所与のものと見なされ、国内での民族的一体性の強調に焦点が当てられている。但し、トリアノン条約以後のハンガリー・ナショナリズムを考える上では「解体された歴史的領土」という空間的要素を考慮せねばならない。

一方で、ハンガリー国家の一体性に関する議論では、近代西欧型の「市民的権利」の観点も不可欠な要素である[69]。近現代のハンガリー政治において「革命と自由闘争 forradalom és szabadságharc」はナショナリズムとの関連で常に参照されてきた。近代史では特に1848年革命とその後の独立戦争が重要であり、その後のハンガリーで大きな政治変動の起きた1918年・1956年・1989年にそれぞれ参照され、現在もハンガリー・ナショナリズムの大きな基盤である[70]。この1848年革命の現代的評価について、ロジャース・ブルーベイカーはマルギット・フェイシュミットとの共同研究で革命150周年の1998年3月15日におけるハンガリー・スロヴァキア・ルーマニアの動向の比較分析を行い、1998年のハンガリーでの「1848年」の語りが、欧州統合を目指す文脈と呼応してナショナリズム的な要素よりも普遍的な「市民化」の観点に注目されていることを指摘している[71]。ここからハンガリー・ナショナリズムが空間的には国境外のマジャル系住民を含めた歴史的領土を包摂するだけでなく、「民主主義」・「市民的権利」を基盤とする国家の独立性も意識していることも指摘できる。そして、その正統性の根拠として1848年革命を中心に各種の民族的抵抗運動と見なされる事件が参照されているのである。

以上から、現代のハンガリー・ナショナリズムの特徴について若干の試論を

提示するならば、マジャル民族の居住空間としての歴史的領土、国家形成理念としての「民主主義」と「ハンガリー国民」が有する「市民的権利」、それらの正統性を担保するナショナル・ヒストリーという空間・理念・時間の三要素が密接に絡まり合っていることが指摘できる。2010 年のカーロイ像をめぐる論争はそれを端的に示した事件であったと言えよう。

注

1 本稿でのマジャル系の人物の人名は、姓・名の順で表記する。また、形容詞 “magyar” の訳語は、ハンガリー国家を意味する場合は「ハンガリー」と、民族・言語・文化などエスニックな要素として用いる場合は「マジャル」と定めた。

2 Romsics, Gergely, „A Habsburg Monarchia felbomlásának osztrák és magyar mítoszai az emlékirat-irodalom tükrében,” in Romsics, Ignác(szerk.), *Mítoszok, legendák, tévhitek a 20.századi magyar történelemről*, Budapest, Osiris Kiadó, 2005, 89.

3 Ibid., 128-130.

4 Jászi, Oszkár, *Magyar kálvária, magyar feltámadás: a két forradalom értelme jelentősége és tanulságai*, Bécs, Bécsi Magyar Kiadó, 1920; Károlyi, Michael, *Gegen eine ganze Welt*, München, M. Müller et Sohn, 1923 など。

5 Garami, Ernő, *Forrongó Magyarország*, Budapest, Primusz Könyvkiadó, 1922 はカーロイ政権にも参加した社会民主党右派の政治家による革命回顧録だが、同書によるカーロイと社会民主党中央派への攻撃はカーロイ政権の関係者の間で論争となった。

6 Szekfű, Gyula, *Három nemzedék: egy hanyatló kor története*, Budapest, „Élet” irodalmi és nyomda R.T., 1920 など。

7 Siklós, András, *Az 1918-1919. évi magyarországi forradalmak : források, feldolgozások*, Budapest, Tankönyvkiadó, 1964, 143-173.

8 先に挙げた Siklós, András, *Az 1918-1919. évi magyarországi forradalmak : források, feldolgozások*, Budapest, Tankönyvkiadó, 1964 では、革命期から 1962 年 12 月までの 1918-19 年革命に関する出版物の解題が行われている。

9 Fukász, György, *A magyarorszaági polgaári radikalizmus törteéneteéhez, 1900-1918*, Budapest, Gondolat, 1960.

10 Hajdu, Tibor, *Az 1918-as magyarországi polgári demokratikus forradalom*, Budapest : Kossuth Könyvkiadó, 1968; Id., *A magyarországi Tanácsköztársaság*, Budapest, Kossuth Könyvkiadó, 1969.　1969 年にはハンガリー歴史協会による学術雑誌『諸世紀』で 1919 年 3 月の共産主義革命から 50 周年の特集が組まれた。

11 Károlyi Mihály, *Egy egész világ ellen*, Budapest, Gondolat, 1965(1923 年の再版。記述は 1918 年 10 月末の革命勃発直前まで); 著作集の刊行も行われた。Kiss, Szilvia (Vál., Sajtó alá rendezte), *Károlyi Mihály válogatott írásai : 1920-1946 I-II*, Budapest, Tanulmány Kiadó, 1964; Károlyi Mihály, *Az új Magyarországért*, Budapest, Magvető Könyvkiadó, 1968 の後半は 1922 年以降に書かれたと思われる革命期の回顧録も収録されている。

12 Hajdu, Tibor, *Károlyi Mihály : Politikai életrajz*, Budapest, Kossuth Könyvkiadó, 1978.

13 Litván, György, *“Magyar gondolat - szabad gondolat” : nacionalizmus és progresszió a század*

eleji Magyarországon, Budapest, Magvető Könyvkiadó, 1978. など。

但しリトヴァーンは1956年の政治活動に対して服役経験があるように共産主義体制に批判的な立場であり、自身の政治姿勢を研究対象に擬えた側面があった。Cf. 辻河典子「書評 Litvan Gyorgy, *Jaszi Oszkar* (Budapest, Osiris, 2003)/*A Twentieth-century Prophet: Oscar Jaszi 1875-1957*(Budapest & New York, Central European University Press, 2006)」、『東欧史研究』29号、48, 53-54。

14 例えば Hanák, Péter, *Jászi Oszkár dunai patriotizmusa*, Budapest, Magvető Kiadó, 1985.

15 外交史でも Ormos, Mária, *Padvától Trianonig: 1918-1920*, Budapest, Kossuth Könyvkiadó, 1983 が刊行された。

16 Litván, György, "Károlyi Mihály és a forradalmak kora," in *A magyar történelem vitatott személységei*, Budapest Kossuth Kiadó, 2008, 211-223; Ormos, Mária, "A Károlyi-kérdés," in *A magyar történelem vitatott személységei*, 224-233 など。

17 設立時の正式名称は「青年民主同盟 Fiatal Demokraták Szövetsége」。この略称フィデス Fidesz がその後の相次ぐ党名変更でも残り（1995-2003年フィデス＝ハンガリー市民党、2003年以降フィデス＝ハンガリー市民連盟）、通称となっている。ブダペシュトのビボー・イシュトヴァーン学寮などを中心とする大学生など若手知識人によって1988年3月に結成された。オルバーンは設立メンバーの一員で、1989年6月のナジ・イムレ再葬の際に駐留ソ連軍の撤退と複数政党制による自由選挙を要求する演説を行ったように、体制転換時の急進的な青年運動の代表的人物としてハンガリーでは知られている。

18 „A teljes balatonőszödi szöveg," *Népszabadság Online*, 2007. máj. 26., http://nol.hu/archivum/archiv-417593

19 „A Kossuth tériek nem kértek területhasználati engedélyt: Csökkent a rendőri készültség," *Népszabadság Online*, 2006. szep. 27., http://nol.hu/archivum/archiv-418791

20 こうした動きに対して、現在のハンガリーにおいて左派系の中心的な新聞である社会党機関紙『ネープ・サバッチャーグ（人民の自由）』は、フランスの『ル・モンド』紙がこうした言説を行ったフィデスには10月23日に見られた暴動の責任があるとする記事を掲載したことを紹介している。„A Le Monde a Fideszt teszi felelőssé a zavargásokért," *Népszabadság Online*, 2006. okt. 24., http://nol.hu/archivum/archiv-421875

21 „Az Erzsébet hídnál fejeződött be a harc: A rendőrségi akció a Kossuth téren kezd_dött - 24 órát tartott," *Népszabadság Online*, 2006. okt. 24., http://nol.hu/archivum/archiv-421774

22 „Gyurcsány bocsánatot kért és bizalmat kapott: Orbán nemzeti egységkormányt követel és gy_lést hirdet minden napra," *Népszabadság Online*, 2006. okt. 7., http://nol.hu/archivum/archiv-419957

23 ヨッビクは2007年8月に関連組織として準軍事組織「ハンガリー防衛団運動」（通称「ハンガリー防衛団」）を結成し、国内各地でロマ襲撃などを行うようになった。同組織は2009年7月に裁判所より解散を命じられるが、直後に「新ハンガリー防衛団運動」を結成して現在に至る。

24 "PRESS RELEASE: 7 May 2008 - Publication of the ECB Convergence Report 2008," http://www.ecb.int/press/pr/date/2008/html/pr080507.en.html

25 対ユーロ相場の推移は欧州中央銀行のサイト http://www.ecb.int/stats/exchange/eurofxref/html/eurofxref-graph-huf.en.html に詳しい。

26 2009年1月までの政府の対策については政府広報の web ページに掲載。http://www.kormanyszovivo.hu/page/pv_mit_tesz_a_magyar_kormany

27 „Gyurcsány: alakítsunk új kormányt, új kormányfővel,” *Népszabadság Online*, 2009. márc. 21., http://nol.hu/belfold/megkezdodott_az_mszp_kongresszusa

28 „Bajnai Gordon letette a kormányfővel esküt,” *Népszabadság Online*, 2009. ápr. 14., http://nol.hu/belfold/gyorshir__bajnai_az_uj_kormanyfo

29 割当議席は 22 議席。各党の獲得票数とその割合はハンガリーの全国選挙局の web ページに掲載。http://www.valasztas.hu/hu/ep2009/7/7_0_index.html

30 フィデスは 1990 年代前半より党の方針を保守化させており、キリスト教民主人民党は 2006 年春の国会議員選挙からフィデスと選挙協力を行っている。

31 „Az Európai Zöld Pártba tart az LMP,” 2009. júl. 9., http://lehetmas.hu/hirek/466

32 詳細は選挙局の web サイトに掲載。
http://www.valasztas.hu/hu/parval2010/354/354_0_index.html

33 詳細は選挙局の web サイトに掲載。
http://www.valasztas.hu/hu/onkval2010/471/471_0_index.html

34 „Nem revíziót, hanem békét kínálunk szomszédainknak!: Szili Katalin volt az egyetlen szocialista politikus, aki részt vett az emléküléseken,” *Népszabadság Online*, 2010. jún.5., http://nol.hu/belfold/_nem_reviziot__hanem_beket_kinalunk_szomszedainknak__

35 以下 „Jobbikos politikusok fekete lepellel takarták le Károlyi Mihály budapesti szobrát,” Magyar Távirati Iroda, 2010.06.03.　以下ハンガリー通信社 Magyar Távirati Iroda は MTI と略記。同社配信記事は登録制データベース http://archiv1988tol.mti.hu/docview.faces を参照した。

36 ブダ南部の市境近くに 1993 年 6 月開園。体制転換後に撤去された共産主義期の記念碑が展示されている。

37 1861-1918 年。19 世紀末から 20 世紀初頭のハンガリーの政治家。1903-05 年と 1913-17 年に首相を務める。第一次世界大戦開戦時の首相で、世紀転換期の改革派知識人に対抗する論陣も張った。旧体制の象徴的な存在として 1918 年 10 月 31 日に兵士によって殺害された。2011 年 10 月末には追悼行事の中で彼の銅像も公開されている。

38 以上のヨッビク議員の活動は „A Jobbik szobrokat cserélne a Kossuth téren,” *Népszabadság Online*, 2010.jún.14. http://nol.hu/belfold/a_jobbik_szobrokat_cserelne_a_kossuth_teren

39 „Az MSZP tiltakozik a Károlyi-szobor letakarása ellen,” MTI, 2010.06.03.

40 „Zöld Baloldal: gyalázatos a történelem meghamisítása,” MTI, 2010.06.03.

41 http://www.magyarhirlap.hu/belfold/kover_laszlo_gyurcsanyek_el_fognak_tunni.html
同記事によるとケヴェールは社会党がケートリを正当に評価していないという見解から批判したが、ハンガリーのユダヤ人問題での著作があるペレ・ヤーノシュは経済週刊誌 hvg のサイトでケートリの頭像が 2006 年にブダペシュト 7 区に設置されている点を指摘した。Cf. Pelle, János, „Mi legyen Károlyi Mihály szobrával?,” *HVG.hu*, 2010. jún.11., , http://hvg.hu/velemeny/20100611_karolyi_szobrok_kover

42 全文は „OS-AZ MSZP MEGVÉDI A KÁROLYI MIHÁLY SZOBRÁT,” MTI, 2010.06.11.

43 同集会の様子はヨッビク党首ヴォナ・ガーボルのサイトを参照した。
„Az utca a miénk és a miénk is marad! - Horthyra emlékezett, a “forradalom” elszabotálása ellen tüntetett a Jobbik’” http://www.vonagabor.hu/content/az-utca-mi%C3%A9nk-%C3%A9s-mi%C3%A9nk-marad-horthyra-em1%C3%A9kezett-forradalom-elszabot%C3%A1l%C3%A1sa-ellen-t%C3%BCntetett-jo

44 体制転換後のハンガリーは「第三の共和国」という位置づけである。

45 詳細は „Emitt Horthyt, amott Károlyit ünnepelték,” *Népszabadság Online*, 2010. nov. 17., http://nol.hu/lap/mo/20101117-emitt_horthyt__amott_karolyit_unnepeltek

46 „A széls_jobb ellen tüntettek Károlyi szobránál,” *Népszabadság Online*, 2010. nov. 22., http://nol.hu/belfold/20101122-a_szelsojobb_ellen_tuntettek_karolyi_szobranal http://m-a-l.hu/?p=hir&id=1893 にある呼びかけ文は現与党がカーロイ像を守る意思がないことを批判し、「愛国者」の集合を呼びかけていた。

47 1918-19 年の一連の革命にはユダヤ系政治家・知識人も多数参加した。演説文は „Nem szabad megengedni a zsidóság démonizálását(2010-11-21 17:45:44)” http://www.mazsihisz.hu/2010/ 11/21/nem-szabad-megengedni-a-zsidosag-demonizalasat-3746.html

48 http://charta.info.hu/；同憲章は 2008 年 7 月にブダペシュトで行われたプライド・パレードでいわゆる極右勢力が妨害を行ったことを契機に、当時のジュルチャーニ首相が提唱して同年 8 月に起草された。反暴力、反差別、民主的立憲主義の遵守などを訴え、ジュルチャーニの他、1990-2000 年に大統領を務めたゲンツ・アールパードなど左派系の政治家・知識人 275 名が署名。2010 年秋以降、ジュルチャーニは同憲章を中心とした独自会派「民主連合」を社会党内で立ち上げ、社会党内部の亀裂も深まっていった。民主連合は、2011 年 10 月に国会外政党の民主党を形式的に引き継ぐ形で新党として成立した。

49 演説全文は http://charta.info.hu/hirek/2010/marton-laszlo-beszede-a-karolyi-szobornal に掲載。

50 ホルティを摂政とする戦間期の体制は、領土修正要求を最大の政治課題と位置づけた結果、1930 年代以降はドイツに接近する。革命協力者やユダヤ人に対する 1919 年夏以降の反革命的暴力行為である「白色テロル」を容認し、最終的に第二次世界大戦参戦に至った体制として、第二次世界大戦後の共産主義時代特に 1970 年代までは、ホルティ体制はファシズムの一種として扱われる傾向にあった。

51 世紀転換期のハンガリーで活躍した詩人（1877-1919 年）。ブダペシュトで改革派知識人が集った雑誌『二○世紀』に参加した後、1908 年に文芸誌『西方』を刊行して精力的に作品を発表する。同時に、当時のハンガリー社会の「後進性」を批判する政治的な論考も執筆している。カーロイ政権に参加はしなかったが、当時のハンガリーにおける社会改革派の代表的な知識人として位置づけられている。

52 „A szélsőjobb ellen tüntettek Károlyi szobránál,” *Népszabadság Online*, 2010. nov. 22.. http://www.nol.hu/belfold/20101122-a_szelsojobb_ellen_tuntettek_karolyi_szobranal

53 „KDNP: Károlyi Mihály szobra ne legyen a Kossuth téren,” *Népszava*, 2011. marc. 22., http://www.nepszava.hu/articles/article.php?id=406641

54 „Országgyúlés Hivatala H/3651,” http://www.parlament.hu/irom39/03651/03651.pdf

55 „H/3651 A budapesti Kossuth Lajos tér rekonstrukciójáról,” *Iromány adatai 2010-*, http://www.mkogy.hu/internet/plsql/ogy_irom.irom_adat?p_ckl=39&p_izon-3651

56 „OGY-Átalakulhat a Kossuth tér, költöznie kell a kormánynak,” MTI, 2011.07.11.

57 „Fővárosi Közgy_lés - Huszonhat budapesti közterület kap új nevet,” MTI, 2011.04.27.

58 Zeidler, Miklós, *Ideas on Territorial Revision in Hungary 1920-1945*, New York, Columbia UP, 2007.

59 „Hajdu Tibor: Károlyit tévesen tüntetik fel bűnbakként(1.rész),” MTI, 2010.06.20.

60 „Zeidler Miklós: Károlyi nem volt hazaáruló, de kormányzása kudarcot vallott (1.rész),” MTI, 2010.06.20.

61 Ibid.

62 Ibid.

63 Ibid.

64 以下 „Zeidler Miklós: Károlyi nem volt hazaáruló, de kormányzása kudarcot vallott (2.rész),” MTI, 2010.06.20.

65 以下 „Pritz Pál: Károlyi Mihály nem késlekedett az ország védelmével,” MTI, 2010.10.27.

66 以下 Ibid.

67 以下 Ibid.；ポークのハンガリー近現代史におけるスケープゴート論は Pók, Attila, „Bűnbakkeresés a huszadik századi Magyarországon,” *Történelmi Szemle*, XLVIIévf., 1-2.sz., 47-67. など。

68 ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007 年、166-167, 181-184。但し、アンダーソンはヤーシ・オスカールとイグノトゥスの論考を参照している。二人は雑誌『二〇世紀』に参加した世紀転換期以来の改革派で、君主国の解体が内在的な要因によってもたらされたと考える立場から議論を進めている。

69 Brubaker, Rogers & Feischmidt, Margit, “1848 in 1998: The Politics of Commemoration in Hungary, Romania, and Slovakia,” *Comparative Studies in Society and History*, Vol.44, No.4, 714-718.

70 Dénes, Iván Zoltán, “Reinterpreting a ‘Founding Father’: Kossuth Images and Their Contexts, 1848-2009,” *East Central Europe*, Vol.37, No.1, 90-117 は 19 世紀後半以来のハンガリーにおけるコシュートの表象とその政治利用を整理した研究で、近年はコシュートの脱神話化が進んできたことが指摘されている。

　過去の革命・対外戦争の参照として、本稿で論じるカーロイ・ミハーイに関連した例としては、ヤーシ・オスカールが英語版の革命回顧録で「特にカーロイ伯の名は（…）彼をラーコーツィとコシュートの伝統の継承者と見なす労働者と土地無し農民の間では伝説的な後光に囲まれている」とカーロイを 1703-11 年に反ハプスブルク戦争を導いたラーコーツィ・フェレンツ 2 世と 1848 年革命を主導したコシュートに重ねる記述を行っている。但し、執筆当時のヤーシはウィーンを拠点に「十月革命」をハンガリーに再興させることを目指して反ホルティの亡命政治活動を行っており、この革命回顧録も政治的著作物として読む必要がある。Cf. Jászi, Oszkár, *Revolution and Counter-revolution in Hungary*, London, P.S. King, 1924, 225-226.

71 一方で、スロヴァキアとルーマニアのマジャル系住民は、1848 年と民族的少数派として権利と承認を要求する彼らの政治的立場を結びつける形で、ナショナルな感情を伴いながら民族的抑圧に対する未完の闘争としての「自由闘争 szabadságharc」を第一に語っていた。Cf. Brubaker& Feischmidt, “1848 in 1998,” 718-725.

※本稿で参照した web ページは全て 2011 年 11 月 18 日に確認。

※本論文は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の研究成果の一部である。